



天遠地方

⑥ パートナーシップ

自由な国境観光

両会で忙しい北京から、私は黒龍江省の黒河に飛んだ。そこから中露間を流れる黒龍江／アムール川を渡り、ハバロフスク（“ハバ”と略称）を訪れ、綏芬河から中国に再入国して、国境地帯を1人で1週間放浪した。中露の経済協力の現状を理解するのが主目的だったが、それ以外にも多くの発見があった。

こうした旅が、たいして頑張らなくてもできるのがまず驚きだ。アムール川の支流、ウスリー川の中洲の珍宝島／ダマンスキー島で中ソ両軍が激突したのはちょうど半世紀前。つまり今回行ったのは、かつて厳戒態勢に置かれていた地域だ。

しかし現在、中国側はどの街も国境貿易で賑わい、ロシアの人々の生活も安定し、安全面の不安は全く感じなかった。日本人が中国にノービザで入国できるのはもちろんだが、ロシアも数年前から極東地域のE-ビザ制度を運用している。陸路入国ではまだ使えないが、1度きりの入国であれば、ネットで事前に申請を入力し、大使館等で無料で通常のビザが取れる。

それに、ロシアの寝台列車も中国の高速鉄道も、自分で手配できる。SIMカードさえ手に入れておけば、街に歩いてからの移動は百度地図かGoogleマップ頼み。少し長距離なら滴滴かYandex.Taxiという配車サービスで車が呼べる（とも

に英語対応)。食事をすれば、中国での支払いはWeChat Pay。ロシアでは小さなお店でもほぼビザカードが使え、そこらじゅうのATMで現金が引き出せる。私はロシア語がで

きないが、キリル文字の看板の読み取りも寝台列車でのおしゃべりも、スマホのGoogle翻訳アプリでなんとかなった。ガイドブックさえあれば、旅行会社を介さない自由なボーターツアーが可能だ。

国境に住む人々

印象的だったのは、国境地帯に住む多くの人々が、相手国の言葉を話し、相手国の社会を高くリスペクトしていたこと。黒河でも綏芬河でも、もう30年以上も国境貿易が行われ、人の往来が途切れないため、地元民はみな最低でも片言の会話はできるそうだ。

多くの中国人は、ロシアは教育・医療・年金などの制度が整っていて羨ましいと述べ、ロシア経済の冷え込みを自分たちの痛みと感じていた。双方向に留学生がたくさんおり、国際結婚も普通だという。

実は、これまでに回った中国の他の国境地帯では、中国の民間人から相手国を見下すような発言をよく聞いたため、私はここでもそれを予想していた。しかし今回出会った中国人はいずれも、ロシア人とロシアという国家をとて

も肯定的に述べていた。むしろ、ロシア入りを不安がっていた私は、世話焼きな地元民に、「むこうの人はやさしいし社会制度も整っているから、ぜんぜん心配いらないよ」と励まされながら国境を渡った。かつての国境紛争の地で、ここまで民間感情が改善し、「平和共存」の日常が生まれているのは大きな成果だ。

中露両国の距離

ただし同時に、中露関係がEUのような国家融合状態に向かいそうにないことも、今回の調査でよくわかった。中露の経済協力は、北京とモスクワ（ハバから時差7時間！）に依然厳しくコントロールされている。高速道路や鉄道、橋などのインフラ建設だけでなく、経済関係強化のための行政措置や国際会議の開催についても、地元政府はまず積極性を発揮できない。中国と南方隣国との関係においては、中国の地方政府が隣国の中央政府と緊密な連絡関係を持っていることが普通なのに、大きな違いがある。また、ロシアは中国人労働者の入国を厳しく制限してもいる。

ハバ市の博物館の特別展で偶然、ダマンスキー島の戦闘に参加した旧ソ連兵2人に出会った。私は、日米間では退役軍人どうしが再会して互いに健闘を称えあう機会が何度も持たれているが、中露間ではどうでしょう、と聞いてみた。老兵は首を激しく横に振り、そんな機会はこれまで一度もなかった、我われは数年前にダマンスキー島（現中国領）の再訪を申請したが中国はその許可すら出さない、と述べた。それがパートナーシップ（中露）と同盟（日米）の違いか、と私は妙に納得したのだった。

（益尾知佐子・九州大学比較社会文化研究院准教授）

ボーターツアーのすすめ